

Title	ドストエフスキイの実験的世界
Author(s)	武藤, 洋二
Citation	大阪外国語大学学報. 60 p.1-p.10
Issue Date	1982-10-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80927
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ドストエフスキイの実験的世界

武 藤 洋 二

ЭКСПЕРИМЕНТАЛЬНЫЙ МИР ДОСТОЕВСКОГО

МУТО Ёдзи

Содержание

- 1 Подполье — лаборатория
- 2 Ставрогин — экспериментальный человек
- 3 Мышкин — пришелец из утопии

Примечания

1

ドストエフスキイの『地下室の手記』(1864年)は、自己分析を逃避の手段にする知識人の告白である。

ポーの『モルグ街の殺人』(1841年)では、主人公は分析することに快楽を感じる。分析的な人間は、分析力を発揮することそのものが快楽である、と作者は説明している。ポーの主人公は、分析のための分析を楽しむ。分析の対象は、なんでもいい。

ドストエフスキイの主人公である地下生活者は、自分を対象にする。彼は、自己分析にふけり、その快楽について語る。地下生活者の快楽は、ポーの主人公の快楽とちがって、自分を、まるで他人のように、徹底的に分析する快楽である。

ポーは、『モルグ街の殺人』のなかで、分析的性格を分析することは、ほとんど不可能である、と書いている。ところが、地下生活者は、自分を分析するだけでなく、自分を分析している自分をも分析する。自己分析している自分を分析することが、彼にとって重要である。なぜなら、自分が自分をあやつっていることを自分で意識することによって、自分の真の姿を客観視し、この客観視をもとにして自己操作をさらにおこなうのが彼の逃避の方法だからである。

彼は、たとえば、苦しんでいるとき、苦しんでいる自分を他人化することによって、苦しみからのがれる。自分の他人化とは、自分を、苦しんでいる自分と、苦しんでいる自分を意識する自分とに分離することである。これは、自分を意識の上で分裂させることによって、苦しみから遠ざかる方法である。これを試みるさい、地下生活者は、そのような操作をおこなっている自分に

嫌悪を感じ、操作を御破算にしてしまい元の苦しんでいる自分にもどってしまうことがある。しかし、苦しみをせおうことができないので、ふたたび操作を始める。地下生活者は、これをはてしなく繰り返す。これは、逃避者による意識の永久運動である。「地下室」は、この運動の場である。

これは、苦しみとむきあうかわりに、苦しみと自分との関係を変えようとする試みである。自己分析は、この手段である。

地下生活者がいう快樂とは、自分が自分からこのようにして遠ざかっていく、と感ずることである。これは、逃避の快樂である。彼は、苦しみのである現実から、この快樂を感じながら逃げようとする。快樂をとまなう逃走とは、逃げの責めを感じないで逃げることである。

地下生活者の快樂とは、したがって自己救済の感ずと意識のことである。自分が助かりつつあるという感ずと意識は、快樂である。自分が自分を救っていると感じることは、さらに大きな快樂である。

地下生活者は、快樂を語ることによって、自己流の現実逃避の術を告白したのである。

苦しんでいる自分を自分から切り離す方法は、次のようにしておこなわれる。

たとえば、屈辱を感じること自体は、もちろん快樂ではない。ところが、屈辱に意識を集中すると、それは単なる屈辱でなくなる。屈辱は意識によって肥大化し、自分はもう八方ふさがりだ、と感じるようになる。「出口がない」と感じるころまでいきつくと、あの快樂がまっている。

「快樂は、そこではまさに自分の屈辱のあまりにも明白な意識からきていたのだ^{註1}。」

なぜ、強く意識された屈辱が、快樂を生みだすのか。

出口のないところまでくると、出口をさがすことは、無意味である。そこでは、もはや出口をさがすべきだ、という声が自分を苦しめることはない。どんづまりに行きつくことによって心の平安がえられる。

自分からすすんで出口のない部屋に入り、出口がないことを意識し、出口がないので出口をさがす苦しみから解放された、とよろこぶのが地下生活者の自己救済の術である。地下生活者の快樂は、あがく必要のない地点、自分の分身に責められない地点に到着した喜びである。出口がない状態は、あくせくする必要から解放された絶望の安全地帯である。地下生活者は、苦しみ、痛み、屈辱を意識によってどんづまりの状態にまでもっていき、この安全地帯をつくる。彼が口にする「やけつくような快樂」とは、この安全地帯の居心地のことである。

地下生活者は、「地下室」でこの安全地帯をつくる作業をおこなう。

これは、自虐による自己防衛である。

現実を恐怖する地下生活者は、自分で自分に手を下すことによって、現実の重圧を意識の上で避ける。地下生活者が、自分を絶望におとし、快樂を感じるのは、自虐が自己救済だからである。自虐の快樂は、自己救済の快樂である。

自己分析によってこのような作業をおこなう場が「地下室」である。 .

地下生活者は、人間の意識がどのように働くかを、自分を例にして示す。「地下室」は、彼自身を材料にして、人間の意識の働きを徹底的に究明する場になる。

ドストエフスキイの世界では、人間は、徹底化という方法によってつかみだされる。人間という「謎」をとくために、人間の内面のある特徴を集約的に体现している人物がつくられる。その特徴の働きが徹底的に追求される。すると、追求されたものは、日常的なわく組をはみだしてしまう。それは、人間が日常生活のなかで平均的に、分別の範囲内で自分を発揮している次元をこえてしまう。追求の対象は、につめられて非日常的に肥大化する。その部分は、自分の一部としてかかえこむのが苦しいほどに大きくなる。

このような濃縮化は、人間を徹底的に追求すれば、どうなるかという問をもった実験になる。

「地下室」は、したがって、実験室をかねる。日常生活に必要な量の何倍もの、「病的な」「過剰な」意識が働く「地下室」は、実験室になる。この実験室では、逃避という主題にそって実験がおこなわれる。「地下室」には、意識による逃避の場と、人間の意識の働きを徹底的に追う場としての実験室とが一体化している。

地下生活者が、逃げ場としての「地下室」から出ないですむように意識を操作するとき、彼はその行為そのものによって自分を実験材料にしている。この意味で、彼のおこなう自己分析は、人間認識のための人体実験になる。

地下生活者は、自演し、同時に、説明する。彼は、意識を駆使して逃げつづけ、その最中に自分をさして、ほら、人間とはこんなに病的な複雑さをもっているのだ、と解説する。この説明は、実験の中間報告である。この報告そのものが、また、彼の意識の操縦、観念の操作の一部になる。なぜなら、彼は、自分の内面について説明することによって、自分をあたかも他人のようにあつかい、自分の心をあやつろうとするからである。

「地下室」を心のなかにもっている地下生活者は、実験者であり実験材料であり実験室である。

「地下室」からでた、人間についての実験報告は、その後の長篇小説群のさまざまな登場人物の口から語られる。

「地下室」は、生物の基盤である自然からも、現実の社会からも意識によって隔離されている。地下生活者の類は、だから、もはや自然から生れた痕跡すらなく、蒸溜器から生れたとっていいくらいである。地下生活者は、「蒸溜器人間」^{注2}という呼び名をつくりだす。これは、おそらく、蒸溜器のなかで小人をつくらうとした錬金術師たちの試みを下じきにしている。ゲーテのファウスト博士の弟子ヴァーグナーは、「人間の原素」を合成して蒸溜器に入れて密封し、蒸溜することによって小さな人造人間ホームクルスをつくった。

意識をあやつり（蒸溜し）、自分自身を自然（母体）から切りはなしてしまう地下生活者は、自分自身でヴァーグナーとホームクルスとを兼ねている。彼は、自分を蒸溜器のなかへ閉じこめる。

「地下室」は、自然と社会とのなかにある蒸溜器である。

この「蒸溜器人間」をさらに蒸溜したらどうなるか。この人間の特徴を徹底的に濃縮したらど

うなるか。生物をなりたたせている血と肉とがなくなる。自分自身の体を失ってしまう。すると、それは、もはや個であることすらできないから、一般性という抽象物になってしまう。地下生活者は、これを「一般人間^{注3}」と名づける。

これは、「地下室」での意識の操作につかれはてたあげく、自分を返上することによって、はてしない意識の廻転からのがれようとする知識人の最終的な姿である。これは、個人であることを放棄して、一般性に身をあずけた人間である。

地下生活者が、自分の作業を続けていったあげくにたどりつく予定された未来形が、「一般人間」である。これは、「蒸溜器人間」の最終形態である。

ドストエフスキイは、地下生活者型の人間を「ふつうよりも目立つように^{注4}」読者の前に引きだした。これは、非日常的次元での追求であり、この極みにつかみだされたのが「一般人間」である。これは、まだ存在せず、実験室が予定したものである。これは、したがって、実験の人間といえる。実験の人間は、未来形である。

実験室によって創りだされた人間の未来形は、ドストエフスキイが未来にできだろうと予想した反ユートピア国家の住人として、待機させられる。「一般人間」は、未来の反ユートピア国家がつくりだす人間の型として使うことができる。

地下生活者は、自分を例にして、人間の「広さ」を強調した。彼は、ロシヤの知識人の心の「実におどろくべき多様性^{注5}」について語った。彼は、この「広さ」を二様に使いわけるといえる。

まず第一に、『地下室の手記』全体が示すように、「広さ」は、矛盾し相反する要素が一つの心に同居し、闘いあっている状態である。これは、分裂の場になる。自分の分身たちの闘争の場になる。地下生活者は、自分の分裂を実況放送することによって、自分の「広さ」を示した。

「広さ」をもつ人間は、「広い人間」とよばれる。この型の人間は、闘いあう無数の要素を一心にかかえこみ、たえず動揺し分裂していくので、自分の存在をやっかいだと感じている。自分が自分であることが苦しくなる。「広さ」は、近代の知識人がすてることのできない重荷である。すてれば、「一般人間」への道をたどることになる。

第二に、「広さ」は、人間が人間であることを意味するものとして、人間擁護のために使われる。この場合、「広さ」は、水晶宮と名づけられた反ユートピア国家の模型を破壊する根拠になる。

水晶宮は、二面性をもっている。^{注6}一つは、西ヨーロッパの資本主義の終局的な段階だとドストエフスキイが予想したバベルの塔的共同生活である。そこでは、個性をうばいつくされた人間が個人としてでなく、群として生活させられる。二つめは、空想的社会主義者たちが、自分たちの単純で図式的な人間観にもとづいて想定した未来国家である。これもまたバベルの塔的であり、矛盾にみちた存在である人間は、「広さ」をきれいさっぱり整理されて、「狭い」人間にされてしまう。

ドストエフスキイの世界全体のなかでは、水晶宮は、この二つの型の集団生活をあらわす。こ

れは、したがって、資本主義の末期状態と、空想的社会主義者たちが設計した未来国家から合成された反ユートピアである。^{注7}

水晶宮という名前そのものが、十九世紀資本主義の象徴としての万国博の建物である実在の水晶宮と、チェルヌイシエフスキイの小説『何をなすべきか』の理想社会としての水晶宮との二つからきている。

資本主義社会の極限的な姿と、空想的社会主義の理想社会の戯画とが、ドストエフスキイの世界では一致する。この一致が水晶宮を生み出したのである。

『地下室の手記』における水晶宮は、フウリエのファランジュ宮をお手本にした空想的社会主義の未来国家をあらわす。地下生活者は、水晶宮には「広い人間」は入れない、いや、人間という「広い」複雑な生きものは、こんな「狭い」所に住むことはできない、と考える。

地下生活者は、「広さ」にあえぎながらも、一たん水晶宮の前にたつと、「広さ」を少しでもけずられまいと必死になる。水晶宮は、人間の複雑さを単純さに、「広さ」を「狭さ」に変えることによって、人間を自分の住人にする。地下生活者は、水晶宮のことを考えると、やっかいきわまる人間の「広さ」を丸っぽのまま自分でかかえこみ、人間のうちのどの部分もうばわれないようにと、未来の反ユートピア国家と闘う。「広さ」は、人間の存在価値であり存在形態そのものである。彼は、「けいれん」から「体をかくこと」までふくめて人間の活動のあらゆる可能性をまもるために、「狭い」国家の実現に反対する。「狭い」国家と「広い人間」の対立が、ドストエフスキイにおけるユートピアと反ユートピアの問題をつらぬく。ドストエフスキイの反ユートピアとは、未来に出現する最も「狭い」人間の畜群的集団生活である。

近代人にとっての重荷である「広さ」という宿命的なお荷物をすててしまったあげくのはてに生れる「一般人間」を、ドストエフスキイは、水晶宮の住人に転用する。未来の水晶宮型国家では、「広さ」は処分され、人間は個人でなくなるから、「一般人間」になってしまう。

地下生活者は、動揺と分裂の場としての「広さ」に耐えかねて、自分が自分でなくなればいい、そうすれば「地下室」的作業はいらなくなるという心境になっていく。水晶宮に対しては人間の「広さ」を旗じるしにして闘いながら、彼は、いっそのこと「一般人間」になれば楽だろうと思う。「一般人間」には、自己を保つ苦しみがない。「地下室」もいない。

自然から離れ、社会から逃げる地下生活者型の人間がたどりつく極地である「一般人間」は、水晶宮型国家の人間と内容的に一致する。

こうして、実験的人間である「一般人間」は、二つの、あるいは、二重の役をはたす。これは、ドストエフスキイの思想的立場からくる二つの否定を体現する。一つは、「地下室」的作業によって自己を操作していくことの否定であり、二つめは、水晶宮型国家の否定である。

この否定は、未来の人間と国家にむけられている。ドストエフスキイは、実験的人間をつくることによって、未来批判をおこなう。実験は、未来批判のための作業である。

2

ドストエフスキイの世界では、実験室でだけ実験的人間が生れるのではない。日常的現実においても、実験的人間があらわれる。この代表例が『悪霊』(1872年)のスタヴローギンである。スタヴローギンは、地下生活者がおこなう意識による逃避の試みを極限化する人間として登場する。彼は、世界から自分を自由にしようとする。

ラスコーリニコフやイヴァン・カラマーゾフの自由への試みは、自分がやりたいこと、自分にとって一番必要なことを実行する許可状を自分の良心にむけて発行することだった。それは、自分の行動が「真理」にそっているのだと自分に思いこませるための操作であった。彼らの「理論」は、「真理の認可状」を自分にあたえる作業だった。だから、たとえば、『罪と罰』においては、殺人者と犠牲者との関係でなく、殺人者が自分自身に殺人を正当化する試みが中心になる。ラスコーリニコフの「理論」は、斧の使用許可証であった。彼の自由は、斧の使用をふくめて「すべてが許される」次元へ自分が入っている状態のことである。

スタヴローギンは、行動の全面的自由の段階をとおりこしている。彼は、自分に「すべてが許される」自由を獲得するのでなく、自分がすべてから自由である次元へ入ろうとする。これは、世界にたいして何かを企てることによって自己の絶対化をはかるラスコーリニコフ型の人間ではなく、世界と関係をたつことによって自己の絶対化をはかる地下生活者型の人間である。「理論」づくりは、世界との積極的なかわりだから、彼は、それに興味がない。彼は、自分の良心を操縦する手段としての「理論」づくりにあくせくする段階を通過してから、登場する。彼には、思想も必要でない。彼の思想は、分散して「悪霊たち」に植えつけられている。それは、彼にとっては、過去の瓦礫にすぎない。

スタヴローギンは、しばしば突飛な行動をおこなう。これは、彼が、ふつうの人間がもっている価値判断を放棄していること、それから自由になっていることを示す。彼の行動は、価値判断からの自由の表現である。彼は、世界にかまってほしくないのに、自分も世界にかまわない。スタヴローギンは、世界と自分とを無縁にする試みをさせられる。

世界にかかわらないためには、一切の価値判断をすてなければならない。このとき、世界は自分にとって無価値になる。世界を無にするためには、自分を無にしなければならない。このためには、世界と交通しようとするものを自分の中からぬきとればいい。スタヴローギンの仕事は、自分を空っぽにすることである。だから、彼は、必然的に自分自身の内部を覗く。彼は、内面で自分と向いあっているものを消さなければならない。もし彼の内にもはや分身が居ないまでに、彼が空になったとしたら、彼は、そのとき、無を、つまり、自分の心の深淵を見ることになる。自分と向いあうことが深淵をのぞきこむことになる。のぞきこんでいる行為が、彼の存在形態になる。

このとき、彼は、空っぽの自分とむきあっている。彼は、自分が無であることを意識する。目

的を達したかのように見えたこのとき、彼の存在は意味を失う。意味のない存在になろうとした彼にとって、存在そのものが意味を失うとき、意味がないことを意識する自分を消すことが、最後の仕事になる。この仕事は、いわば、自分という無の深淵へ自分の意識を投げこむことである。この投身は、意識の宿である肉体をなくすことによってしか行えない。しかし、これは、自殺であってはならない。なぜなら、自殺は世界にたいする価値判断をとまなうからである。彼は、最後のところで元の木阿彌になりたくない。

「わたしは自殺を恐れる、なぜなら寛大さを示すことを恐れるからだ。」^{注8}

彼の死が、世界にたいする「寛大さ」の表現でないこと、計画どおりに自分の肉体が処分されたにすぎないことを示すために、彼の死体の脳みそが点検され、彼は発狂したのでなく自分の試みをやりとげたことが明らかにされる。

スタヴローギンにとって、自分がこの世に居ると感じることは、異和感であった。彼は、自分がこの世に存在することに異和感を感じていた。この異和感を消すことが、世界と自分とを無関係にする試みであった。

ドストエフスキイは、スタヴローギンに、地下生活者の意識の最終処理をやらせた。

スタヴローギンという、自分であることをやめていく実験を課せられた人間の名に、十字架(スタウロス)がかくれている。彼が背負いつづけた十字架とは、世界と自己意識との相関としての人間存在の重さであったのかもしれない。

自分の存在を重荷に感じ、その重荷をすてるためにさまざまな操作をおこなう知識人たちの実験的極地がスタヴローギンである。このような実験の徹底化は、行きつく先を示すことによって、現段階への認識を深める方法である。スタヴローギンという実験的人間を創って、現実の前スタヴローギンの多数派を認識する方法である。前ガン状態を理解するために、ガンの末期を示す方法である。

この認識方法は、未来を対象としてふくみこむ。だからこそ、ドストエフスキイの文学は、未来に答えるのであり、十九世紀の素材が二〇世紀の認識に役立つのである。

3

未来をかかえこんでいるドストエフスキイの世界では、人類の未来の生活——ユートピアと反ユートピア——が中心問題になる。

ドストエフスキイのユートピアは、「地下室」も水晶宮も否定する。それは、知識人の意識の地獄も未来の人工の天国も否定する。そこでは、抑圧も対立もない、権力者による民衆支配も、人間を一枚の型紙に合わせてしまう水晶宮的操作もない。それは、個人の自由の擁護者としてドストエフスキイが創ったキリストにしたがって生きる共同体である。

ドストエフスキイは、ユートピアを一人の人間像で代表させる。この人間は、地下生活者とも

スタヴローギンとも無縁であり、二つの否定を体現する「一般人間」の対極でなければならない。

反ユートピアの住人「一般人間」にたいして、ユートピアの住人「美しい人間」が創られる。彼は、ユートピアの人間を現実の社会へ派遣する。

ユートピアの人間とは、『白痴』(1869年)の主人公ムイシキンである。彼は、ドストエフスキイのユートピアの原理を体現するキリストと重ねられている。この人間は、トッキイ、ガーニヤ、ロゴジン、エパンチンの札たばと関係のない人間である。これは、また、現実の人間とも共通点をあまりもたない。ムイシキンは、広くもなければ、狭くもない。彼は、世界全体をまないたにして人間が分解され実験され追求されるというドストエフスキイ的認識の過程をくぐらない。彼は、ユートピアからの来訪者として、最初から一つの主張であり規範であり手本である。

このようなムイシキンが、現実の代表者としてのナスターシャ・フィリーポヴナと出会う。彼女の体は、資本主義的売買の対象になっている。彼女は、自分につけられた値段の数字を洗いおとしたい。彼女は苦しんでいる。苦しんでいるので、現実の代表者になる。苦しんでいる人間からみれば、ユートピアからの客は人間である。彼女は、「始めて人間を見ました^{注9}」という。

この「人間」は、苦しんでいる女がおおぎみたユートピア人の「美」のことであって、現実社会の正式な一員ではない。彼は、ブルジョア社会では異物である。この異分子とブルジョア社会とのへだたりは、白痴という設定によってうめられる。白痴は両者の距離である。

ドストエフスキイは、反ユートピアの模型はつくったが、ユートピアの模型はつくらなかった。彼は、人工的に国家をつくるあらゆる試みに、人間の可能性をせばめる仕掛けをみた。彼は、理想社会の模型のかわりに、理想の人間を示す。だから、ドストエフスキイにおけるユートピアと反ユートピアの対立は、理想の人間と反理想的国家との対比によってあらわされている。この場が『白痴』である。

『白痴』の舞台は、金の世の中である。そこには、ラスコーリニコフの斧のかわりに金額の数字がある。斧は人を片づけるが、札たばは人を飼ひ殺しにする。ナスターシャは、飼ひ殺し状態から脱出するために、この札たばを火にくべる。解放の火祭にムイシキンがあらわれる。しかし、彼のユートピアの光は、この火に加勢するわけではない。彼の体現する「美」は、現実の力にはならない。それは、現実との対比のなかで、ユートピアの「美」を知らせる。それが力として動こうとすれば、現実の諸勢力がおしつぶしてしまう。「美」の運命の行末にブルジョア社会の性格がつきとめられ、ユートピアは退却する。『大審問官物語』(1879年)のキリストと同じように、現実の反ユートピア的な力の支配を確認して、ユートピアからの使者は、元の非現実へ引きあげる。

ドストエフスキイは、自分が模型をつくった反ユートピアが未来に一時的に実現すると考えていた。しかし、それは、「人間的自然」にさからってつくられているので、永續きせず、ユートピアが終局的に勝利をおさめるはずであった。

だから、大審問官の国家から追放されたキリストは、ただ単に立ち去るのではない。彼は、当

分の間は大審問官の国家が存続するのを認めて一まず去る。ユートピア実現の日に正式に再臨するために引きあげるのである。『大審問官物語』は、反ユートピアの一時的存続と未来におけるユートピアの実現を示唆する。大審問官の国家は、カトリック支配下の十六世紀のスペインであり、同時に、未来における反ユートピアの原型である。

ドストエフスキイの未来は、反ユートピアとユートピアの二段階に分れている。

この遠い未来のユートピアと同時代の人類とを結びつけるのが、キリストでありその変種としてのムイシキンである。彼らは、未来からつかわされた、理想の宣伝者であり、ユートピアと現実との連絡者なのである。

『おかしな人間の夢』(1877年)は、ユートピアと現実との連絡を主題にしている。これは、ある星の話である。その星では、最初、搾取も抑圧もなかった。悲しみもなければ、神もいなかった。黄金時代であった。その後、星は、地球上の階級社会と同じ歴史をたどる。すると、星の住人たちは、以前の理想社会を「おとぎ話」とよびながら、その再現のために祈った。彼らは、それは実現不可能だと知っているが、その願望を大事にし、願望そのものを信仰した。

地球の住人である「おかしな人間」は、星の歴史を知って、変身する。彼は、理想社会をかいま見たので、これを宣伝するために動きはじめる。彼は、自殺することを考えていたのに、夢のなかで星の黄金時代を見たために、自殺をおもいとどまる。理想社会の光が現実の力になる。彼は、ユートピアによって再生する。自分を復活させた「真理」をひろめるために、彼は出かけていく。この短篇は、ユートピアが夢のまた夢であっても、それについての「偉大な思想」をひろめていくことを重要な仕事だと考えるドストエフスキイの立場をあらわしている。この仕事のために、ユートピアからの来訪(『白痴』『大審問官物語』)、あるいは、ユートピアの訪問と帰還(『おかしな人間の夢』)という設定がなされたのである。

理想社会への願望によって自分を養い、この願望が姿勢になる。ドストエフスキイの場合は、こうであった。彼は、理想主義者として、あるいは、理想主義者であるからこそ、現実の人間の深部の営みを徹底的にあばきだし、そこでつかみだされた否定的特徴を集約して人間の未来形をつくりだした。実験によってつくりだされた否定的人間の未来形と、理想社会の体現者とがドストエフスキイの世界では共存する。

ドストエフスキイの世界は未来形である。

注

1 ドストエフスキイからの引用は、現在刊行中の Ф. М. Достоевский. Полное собрание сочинений в тридцати томах, "Наука", Л., 1972—からおこない、巻数と頁数のみしめす。

т. 5, стр. 102

2 т. 5, стр. 104

3 т. 5, стр. 179

4 Т. 5, СТР. 99

5 この「広さ」を主題にしたのが『未成年』(1875年)である。主人公の若者アルカージイは、人間のはてしない複雑さ——「広さ」——を理解したとき大人になる。作品は、「広さ」を理解する過程をえがいている。「広さ」の実例として父親ヴェルシーロフが登場する。彼は、アルカージイを私生児として捨てた人間であり、同時に、理想社会を夢みている「遍歴者」である。アルカージイは、ヴェルシーロフの例から、人間の「広さ」の両端が「理想」と「下劣さ」にあることを知る。ドストエフスキイは、この両端の追求を中心課題にしている。

6 水晶宮、シガリョーフ主義、大審問官の国家は、それぞれ、一面では、階級社会の民衆支配を、他の面では、未来に予想される反ユートピアをあらわす。いいかえれば、ドストエフスキイが作品世界で組立てた反ユートピアの模型は、今までの階級支配の原理と方法とをグロテスクに濃縮したものである。

7 くわしくは、拙稿『ドストエフスキイの水晶宮』(『窓』1980年12月号)を参照。

8 Т. 10, СТР. 514

9 Т. 8, СТР. 148

10 この点およびムイシキン全体については、拙稿『ドストエフスキイとムイシキン』(『大阪外国語大学学報』, 第41号(文学編), 1978年)を参照。